「対話と実行」座談会（H20.11.4(火)　いの町）の概要

●知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット、「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」及び「産業振興計画　中間取りまとめ」（以下のＵＲＬ参照）を基に説明。

（http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf
http://www.kochinet.ed.jp/kinnkyuupuranngaiyou.pdf
http://www.pref.kochi.jp/~seisui/keikaku/cstori.pdf）

●座談会

【間口を広げた補助金、若手経営者に対する教育機会】

Ａさん：高知県商工会連合会青年部のＡです。立場上、地域経済についてお話をさせてもらいたいと思う。現在、商工業者は景気が悪い中で大変苦労されている。ほとんどの商工業者が、県内需要で生業をしているという中で、何とか打って出たいという声を頻繁にここ数年聞くようになった。ただ、その打って出るための資本がなく、皆さん苦労しているという状況があるが、補助金や助成金などについて、使い勝手が悪いというか、制約が多いので、なかなか活かしきれていないのが現状だと思う。うまく要件に合致していれば、非常に有益なものもあると思うが、例えば、開発費に係る費用に対しての補助金でないとだめといった制約があって活かしきれないということを聞く。これについて、県でもう少し間口を広げていただくといったご配慮はいただけないか。

もう一つは、私は30代後半であるが、我々より少し下の世代になると、地域の経済を引っ張っていくけん引役が非常に少なくなっている。５年前と比べても極端に減っている。若手経営者、若手経済人がいないと、地域の活性にもつながっていかないということになるが、この辺について、教育をする場が欲しい。若手経済人に対しての教育機関、教育チャンスが非常に少ない。商工会の中でも、本当はするべきことであるが、予算的に厳しいということもあって、年に１回くらい講習をやるのが精一杯である。年に何回かに分けて勉強会をしたりとか、あるいは、これは経済人でなくてもいいが、若手リーダーというくくりで、県の方で主催していただくチャンスがあれば是非やっていただきたい。農業、商業、工業の別は全く関係なく、リーダーということについては同じだと思うので、リーダーとしての資質を向上させるためのチャンスがいただきたいと思う。

知事：今おっしゃったことは、産業振興計画などの策定の過程でも本質的な議論になったところである。地域のお取り組みやアイデアは、地域の状況によっても違うし、何をやろうとするかによってかなり多様である。それを、あまり狭い間口にしてしまうと、ある一定のものしかできなくなってしまう。地域でいかに元気を出していただいて、できればにぎわいだけではなくて、ビジネスや事業につなげていくようなものをつくっていっていただきたいという思いでやっているときに、あまり間口を狭くしてはいけないと思う。今は、まだ具体的な提案をより練り上げようとしているところだが、産業振興計画　中間取りまとめ（案）の３ページをご覧いただきたい。産業振興計画に位置づけられた事業を対象にという前提はあるが、「生産から販売

に至る各段階で、ハード、ソフトの多様なメニューをパッケージ化した総合補助金を創設」とある。地域の支援という観点から、できるだけ間口を広くという方向で議論を進めているところである。

２点目の若手経済人がいなくなっているという話、４～５年前までは、高校を卒業して県外で就職される方は、全体の４分の１くらいだった。それが、今年の３月では50%を超えていて、近年急激に上がってきている。特に名古屋圏に向けての就職が非常に多かったということであるので、県内が冷え込んで、県外が景気が良かったということなのだろうと思う。若手経済人の皆様方の研修の機会については、まず、高知県立女子大学の改革の話があって、この話そのものがそういうニーズに応えていきたいということでもある。一つは、社会人教育の場をもっと増やしていきたいと考えている。例えば、若くして事業を継がれた方々でも、ちょっとした財務諸表の見方や、機会損失といった概念などを、社会人になられた後でも少し学ばれるだけで、大きく経営感覚が変わってきたりすると思う。そういう場を、永国寺キャンパスを利用して作っていきたい。もう一つは、実は県外に出て行かれる非常に大きな機会の一つが、大学進学時で、文系、いわゆる法律や経済を勉強したい方にとって、県内で高等教育を受ける機会が極端に少ないので、県外に出て行かれる方が、かなりの数、何百人以上の単位でいらっしゃる。なので、こういう方々の多様なニーズに応える受け皿も作っていかないといけないのではないかと思う。永国寺キャンパスなどでは、社会人教育の場と、文系の社会科学系、人文科学系の学部を設けて、選択肢を多様にするという方向で、大学改革をやろうとしている。この間の議会で池キャンパスへの社会福祉系学部の移転をお認めいただいたが、永国寺をどうするかについてこれから議論する中でその問題も考えていきたい。２点目は、いわゆる地元の商業対策で、地元が段々、特に高知市以外だと小さくなってきているわけなので、やはり外に打って出ることを考えないといけない。地域外に打って出て行く、外貨を稼ぐという方向での、経営指導、経営支援といったものをもっと考えられないかなと思っていて、ソフトの面も含めて、その施策を考えることが宿題になっている。産業振興計画の中間取りまとめにも入っていて、具体的なところはまだこれからだが、そういう方向で、新しいメニューを考えたい。

【施設園芸原油高騰緊急対策事業費補助金の要件緩和、ナシの加工、農業についての考え】

Ｂさん：今日、知事の話を初めて聞いて、話し方に勢いがあって、聞いているだけですごくうれしくなったので、来てよかったと思っている。

私は農業をやっていて、最近、重油の価格高騰に伴って、重油に代わるボイラーなどの装置に対する補助金的なものができたが、市町村の中で最低３人以上いないといけないという条件がある。いの町の園芸農家はすごく困っていて、３人どころか、自分１人しかいないという状況になってしまっているところがある。土佐市や高知市春野町などでは、すぐに３人くらいは集まるが、田舎の方になると、やりたいという人はいるが、なかなか条件に当てはまらないということを聞いている。それを考えていただきたいというのが一つである。

それと、いの町では、ナシの栽培が盛んだが、捨てられているものが多い。それで、農業振興センターの方でも加工についてやってくれているみたいだが、何とか早く、どうにかできないのかというところがある。

最後に、大きな話だが、知事は農業に関してどういう考えをお持ちなのか聞きたいと思う。

農業についてだけではなかなか難しいと思うので、園芸作物とか、中山間地域対策とか、エネルギー問題について、知事が考えていることがあれば聞かせていただきたい。

知事：先ほど、外に打って出ると申し上げたが、農業、なかんずく園芸作物というのは、高知の主力の中の主力だと思っている。外貨が稼げる数少ない産業の一つだと思っている。なので、この燃油高騰の対策などについても、実は、国がまだやるかどうか分かっていなかった７月補正の段階で、定植期に間に合わせないと意味がないのでできるだけ早くということで、補正予算を組んだところだった。農業を大切にするということについては、47 都道府県の知事の中でも最も熱心ではないのかなと思っている。農業を今後どのように伸ばしていくかということについて言うと、先ほど申し上げたように、産地間の競争が極めて激化している。特に大規模な市場である、今後いろいろ販売の増加が見込めるはずの首都圏のマーケットに、近隣の茨城県や千葉県から朝採れの野菜が並ぶという状況になっている。高知県の方が技術は高いかもしれないが、結局鮮度で負けてしまうというような状況にある。そういう状況に対して、どのように対応していくのかについては、やはり総合的な戦略が必要だと思っている。特に大切なこととして、生産の段階もさることながら、流通・販売の段階で、いかに戦略的な対応が取れるようにしていくのかということである。これには、園芸連さんなどともしっかりタイアップしてやっていくことが必要だと思っている。まとまって、総合戦略を取って売り込みをかけていきながら、その売り込みの先については多様な販売先を持っていると。いずれにしても、総合的に戦略でコントロールできるような体制をとっていかないといけない。中間取りまとめ（案）の３ページの右上に、「担い手のすそ野を広げ、競争力を強化」、「生産から流通・販売の戦略を生産者と農協等農業団体、行政が共有し、一体となって総合戦略を実践」と書いてあるが、例えば都会における売り込みであるとか、途中の流通段階であるとか、できるだけまとまりながらも最終的な売り先については多様化していくような戦略づくりを行っていきたいという発想である。ただ、高知県の場合、すごく悩ましいのは、生産地が狭くロットが小さいということである。なので、一つには、産品の作り方として、いかに高付加価値化していくかということがポイントの中のポイントではないかと思っている。ＩＰＭ技術というのもやっているが、今後加えていきたいと思っているのは、中国野菜の問題などで非常に問題になっているが、生産履歴を徹底することなど、安全・安心を担保した商品であることを高くアピールするという形で高付加価値化を図っていくというのも非常に大切な戦略ではないかと思っている。もう一つ、売り込みをするときでも、必ず産地と連動した形で売り込みを図っていかないといけないと思っている。産地の状況を踏まえて売っていく体制づくり。販売をする人間と、生産地と連携する人間、これをしっかり結びつける仕組みづくりも、県、園芸連さん、ＪＡさんなどと一体となりながらやっていくことが必要ではないかなと思っている。中山間の農業づくりについては、より土地が狭いということになるので、それぞれの適地で高付加価値の作物を作り、かつ、１種類だけではなくて、複数の作物を作っていくことによって、年間トータルで所得を上げることが重要となる。高知型集落営農というのは、基本的に、適した園芸作物を中山間地域に植えて、かつ、それを連作できるようにしていくという発想で作っていると思うが、そういう仕組みづくりをもっともっと広げていくことが大切かなと思っている。

　それからナシについて、加工といったときに、いわゆるハネ物になったものを加工して、地

域で売っていくという、そういう地域加工というやり方もあると思う。県外に売って行くとなると、ユズのように加工用のものをそもそも作るということが必要になってくるかもしれない。ハネ物などもうまく利用する方法を考えていければいいのだろうと思う。他の作物ではよく聞いているが、ナシについては存じ上げなかったので、それは勉強したいと思う。

重油価格高騰対策について、３人以上という要件は少し高いハードルのようで、地域によってはご不満をお聞きすることがあるが、これは３人以上ということでお願いしたい。なぜかというと、１人でよいとなると、最後まで物が残るので、個人の資産形成に資するということになり、補助金を直接ということはやりにくいところがある。よほど状況がひどくなってくればまた考えないといけないかもしれないが、今すぐは対応ができない状況である。

【製紙産業の高知県における環境】

Ｃさん：製紙工業会のＣです。いの町には製紙会社が 20 社ほどある。従業員は正規社員で約 860 名から 900 名。売上高では約 220 億円。従業員 250 人くらいの大きな会社から、10 人程度の小さい会社まである。我々が作っている紙は特殊な紙が多く、ティッシュペーパー、トイレットペーパーにしても、大企業とはもう戦えなくなっているので、プリントなどの特殊化をして、機能性や付加価値を上げて市場に出していく、一般性からどんどん離れていくことによって、ここまで生き延びてきたというのが現在の形である。そういう意味では、あまり大きな売上げの拡大はなかったが、みんなよく健闘している。今日の話は、２か月前だったら、実は全く違うことを話さざるを得なかったかもしれない。特にこの２年間については、原材料がじわりじわり高騰する、特にこの直近の１年間についてはご存知のような大暴騰が、原材料でも燃料でも起こった。もうコストに耐え切れない状況が続いていたが、２か月前に状況が変わって、もう１回考え直すことができる状況が来ている。それは、油が安くなったことで、我々はエネルギー多消費型の産業で、大量の油を使うので、このコストは大変な負担だった。原材料も、インドや中国などの世界の国々に持っていかれて、パルプが入手できなくなるという状況が生まれた。本州や北四国の競合する製紙会社に比べて、我々高知県の製紙業者は選択できる対応策をほとんど持っていなかった。他の地域だと、環境問題からいっても、もう重油を焚いてはいけないという状況が進んでいるので、ほとんどの本州の会社は天然ガス化が進んでいる。北四国も、坂出に大きな天然ガスのサテライトができたので、これから一気に天然ガス化が進んでいこうかと思う。高知は当面の間、何の選択の余地もなく、油を買うしかない。もう１度油が高騰すれば、圧倒的な競争力の差が出る。パイプラインなども含め、一企業ではどうにも対応できるような問題ではない。コストの差を見せつけられる問題は他にもあって、例えば、原材料はほとんどが輸入パルプに依存している。その輸入パルプは、要は大きな港に入ってくるわけである。今回、物が足りないという状況になったときに、基本的には東京、大阪、神戸の３つの港で、後はすべて陸送だというようなことになった。高知の場合は、フェリーもない、高速道路も高いというどうしようもないロケーションにあり、これがものすごいコストプレッシャーになる。今は油が安くなったが、もう１回油が高くなったときには、我々は高速道路で輸送するしかないので、これが国内の他の地域と伍して戦うためには、大きなハードルになる。インフラが我々は圧倒的に劣っている。こういったことを、この２か月間、２年間も通じてだが、我々は学習してしまった。これからは、よりニッチで、より作りづらいものに走っていく

しかないわけである。我々は、地場産業ということで昔からやってきていて、20の会社はいの町の町並みの中にぽつぽつとある。路地の奥にあったり、大きな道路から遥かに離れていたり、隣には住宅があるわけである。エネルギー対応をしよう、違うボイラーを焚こうというわけにもいかない。ちなみに我々が作っている紙はほとんど県外に行って、県内で消費されることはまずない。そういう意味では、知事のおっしゃるような外貨獲得の産業でもあるわけであるが、その世界がどんどん小さくなっていくという状況にある。環境問題のこともあって、我々は廃水処理や大気汚染の問題を逃げて通るわけにはいかないので、これを進めているが、現在、いの町で進んでいる水質改善対策も、国土交通省が「清流ルネッサンスII」というプロジェクトで、もう随分昔から建設計画には入っているが、予算の執行がうまくいかないということで、なかなか進捗が遅いし、できあがって、最終処分をするそのコストについても大きな負担がこれからかかってこようとしている。これは我々にとって一番不安の種である。現実に我々の仕事が非常に世界経済から圧迫を受けるということがはっきりしたこの２年間だった。県からは売上げの拡大などについて何かいいアイデアがないのかということを言われるが、なかなかそこがうまくいかない。どう思われるか。

知事：今のお話はものすごく勉強になった。原油価格がピークの半分になった。それから、円高については、国外への輸出産業に必ずしも依存していない県なので、むしろ輸入原材料の減などという形でのプラスの側面も他県に比べると大きく効いてくるだろうなと、ほっとしている側面もある。２か月くらい前まで、「対話と実行」座談会でお話をさせていただくと、原油価格高騰の話が本当に大きな課題だった。ピークの半分といっても、まだ高止まりなので、引き続き息は抜けないが、おっしゃったように、本県は、特に原材料や油といった問題について、逃げようがないという、他の県でも類例を見ないような状況なのだろうと思う。おそらく20年、30年くらい前からもっと対応していかないといけなかった根本問題なのだろうと思う。今後に向けて、そういう根本問題にどう取り組んでいくかということについて、１回、課題を整理してみたいと思っている。ただ、今思う話で言わせていただければ、実は従前から言っていることの一つが高速道路料金の値下げ、特に本四（架橋）の値下げで、今回の経済対策で、それは両方ともかなりの部分見直されることとなった。これなどはプラスの材料だろうと思う。もう一つ、多様な交通手段といったときに、先ほどおっしゃったフェリーの話がある。残念ながら今はなくなっているが、原油価格の高騰という逆風が弱まってきつつあるので、できるだけ早く動かないといけないかなと思っている。すぐには動かないと思うが、これは取り組みを始めるべき事項の一つである。３つ目に代替燃料をどう考えるかという問題。天然ガス、パイプラインなどの可能性についても勉強してみたいと思う。また、今推し進めようとしているバイオの施策とどう組み合わせていくのか、これは、製紙業界さんでお使いになれるかは分からないが、県全体で見たときに、そういう代替エネルギーをどう考えていくか。いずれにしても、今おっしゃった話は、本当に大きな、本質的なお話だと思う。短期的な課題から始まって、中長期の課題に向けて、最も逃げようのない県として戦略を構築していく必要があると思った。

【地域力による地域の活性化、広域での介護の取り組み】

Ｄさん：先ほど知事さんの、いわゆる地域力というお話を聞いて、自分たちが考えている地域力

とは、随分差があるなと感じた。というのは、高所大所から見られた地域力で、素晴らしい発想をされて取り組んでおられるということに感銘した。私は、いわゆる地域圏の生活力ということの取り組みについて、お話をしたいと思う。現在、区長という立場で、町政へのいろいろな意見具申、あるいは、町からの配付物の配付や、その十分な住民への浸透といったことを行っている。最近は、地域福祉、防災、防犯といった、地域内のいろいろな事柄についての対応が必要になってきた。また、高齢者や子どもの見守り役というようなことも加わってきて、非常に幅広い取り組みが必要になっている。一つの例をとると、防災会を立ち上げた。きっかけは、私の地域の奥の裏山が崩壊して、お年寄りが孤立したということが５年くらい前にあって、地域の連絡網がないといけないということで立ち上げた。その防災会のおかげで、最近非常に地域の交流が深まっている。そのときに問題になったのが、高齢者の対策で、個人情報保護法の関係もあり、私を登録することはやめてくれという話があった。ところが、いろいろ話してやっていくうちに、自分も何かあったときにはお世話にならないといけないということで、すべてのご高齢者、特に独居者を登録することができた。また、ご高齢のお年寄りの面倒も、こういう立場にあれば、やらないといけない。時によっては、イヌが畑が荒らして困るといった話も来る。そういうことをする、いわゆるリーダー、区長が、最近なり手がないという状況である。自治会というのは、各地域でいろいろお世話してもらわないといけないし、取りまとめてもらわないといけないということで自然的に発生したもので、はっきり言って何の保証もないし、町から若干の補助金をもらっているだけである。私は、地域で地域力を高め、ボランティアが活性化することによって、高知県のすみずみまで地域の活性化が進むのではないかという考えを持っている。熱心に取り組んでいるところなどは、いろいろな機会に紹介したり、あるいは、褒美をあげたりして、皆さんが区長をやりたい、地域のお世話をさせてもらいたいという気持ちになれば、高知県のすみずみの地域がみんな元気になるのではないか。

次に介護保険のことであるが、これは市町村ごとに負担金が定められている。いの町は上から４番目くらいのようだが、年寄りにとっては、何とか少しでも安くしてくれないだろうかという心理が働く。もう少し広域で、介護の取り組みをし、そして、介護条件を組み立てるということができれば、いろいろな面で改善され、また、人件費等についても、広域になればなるほど改善ができるのではないだろうかと思う。まだたくさん課題はあるだろうと思うが、間違いなく高齢化はするし、介護というのは、大きな分野になってくると思う。これらについての、知事さんのお考えをお聞きしたいと思う。

知事：おっしゃったお話については、本当にご指摘のとおりだと思う。高齢化が進んでいるということ、そして、核家族で、地域地域の子どもが非常に孤立をしているのではないかということを踏まえると、地域のつながりを取り戻す仕組みづくりが非常に大切だと思っている。防犯の点、そして何よりも防災の点でもそうだと思う。（財政の）パンフレットの４ページの４の２に「安全・安心なまちづくり」とあるが、自主防災組織をつくっていただくことを奨励しようとしている。特に、津波災害の可能性のある地域などでは、これがすごく重要になってくる。人知を超えたものが起こりうるので、ハード対策だけでは対応できない。そのときに助け合って逃げるという仕組みづくりが必要だということである。ただ、ある要件を満たした自主防災組織だけではなく、おっしゃったように、区会として一生懸命そういうことに取り組まれてい

るところもあると思うので、地域での助け合いや、見守り活動をされているところを、例えば顕彰したり、モデル事例として紹介したりといった取り組みを、組織の形態に関わらず行っていくべきではないかなと思った。ちょっと勉強させていただきたいと思う。

２番目の介護保険の問題について、財政単位をいかに大きくしていくかというのは、大きな課題だろうと思う。介護保険などについても、まだまだ見直さないといけない問題がたくさんある。一つは財政の問題で、いかに財政単位を広域化していくかという問題である。もう一つは、規制緩和などの問題である。都会で通用するいろいろな必置規制が田舎では通用しない点もたくさんあるので、訴えていくべきは訴えていかないといけない。障害者自立支援法も、長寿医療制度もそうだが、これらについては、都会で通用しても田舎で通用しない問題がたくさんあると思っているので、重点的に国にも働きかけたりしている。実は、舛添厚生労働大臣と各県知事との懇談会があって、各県の知事さんが、いかに社会福祉系の制度が地方で評判が悪いかという話をおっしゃった。それを受けて、舛添大臣は、「社会福祉というものは、結局、地方の行政そのもの、地方自治そのもののようなところがある。だから、地方の実情を踏まえた対応をしないといけないのに、国が一律の規制をということをやってしまうから、結局評判が悪くなったのだと思う。なので、施策をつくっていく段階で、できるだけ地方の意見をお聞きする場を設けていきたい」とおっしゃった。これは非常に素晴らしいことだと思っていて、国も、今のままではいけないのではないかという思いが段々出てきているのではないかと思っている。そういう機会をとらえて、打ち込むべきことは打ち込んでいくということを一生懸命やっていきたいと思っているところである。

～休憩～

【仁淀川の砂利採取の禁止、シラスウナギの採捕の禁止】

Ｅさん：私は仁淀川をこよなく愛する者で、仁淀川は流域の市町村、地域にとっても、振興する上での大きな財産と認識をしていて、水辺環境が良いし、水質も良いということで、これで魚がたくさんいれば、さらに交流人口が増大して、地域の活性化につながるというような思いである。２点要望させていただきたい。

仁淀川はかつては、アユ、ウナギ、モクズガニを始めとする魚の宝庫と言われていた豊かな河川であったが、河川の荒廃化が進んで、これらの魚族が著しく減少している。例えば、アユの漁獲量でいうと、30 年前には約 480 トンであったものが、平成 10 年度には 80 トンに減少している。アユがここまで減少したのは、様々な要因の中で、特に砂利の採取によって、産卵場である下流域が砂状になり、良好な産卵場所が失われたということである。このままでは、アユのいない仁淀川になるのではないかと危惧して、平成 13 年ごろ、砂利採取禁止に関して、県に要望した。その結果、県で、平成 14 年度に、仁淀川の砂利採取の影響について調査をしてくださった。土砂堆積量に及ぼす影響として、砂利採取が 50%、（貯水・発電）ダムが 40%、その他（砂防・治山ダム）が 10%という調査結果であった。また、平成 17 年の県議会における砂利採取に関する質問に対し、土木部長さんから、「平成 21 年度を目処に、砂利採取について一定の方針を出したいと考えている」という答弁がなされている。21 年度は来年度だが、是非禁止していただくように要望する。なお、台風、洪水等で、砂利が堆積して、それによる災害

が心配されるという場合は、当然管理採取（の中の特定的砂利採取）をしていただく必要があろうかと思うが、一般の採取については、禁止を要望する。

もう１点は、ウナギの稚魚、いわゆるシラスウナギの採捕の禁止に関する要望だが、県内の河川で今、天然ウナギが激減している。もちろんシラスウナギも減少し、このままでは絶滅するのではないかと私は心配している。シラスウナギ採捕量を高知県全体でみると、昭和 55 年に７トン、平成元年には 5.2 トン、平成 12 年に至って、１トンを割り、935 キロまで減少している。直近では、平成 18 年に 399 キロまで減少し、平成 19 年は 342 キロに減少して、この 30 年間で採捕量が 20 分の１まで減少している。ウナギの人工増殖については、随分研究もされているようであるが、いまだ未知のもので期待ができない。採捕禁止により回復を図らなければ、天然ウナギを次の世代に手渡しできないという思いである。これは養鰻業者等の経営の問題もあるし、その調整が必要なことも理解している。そういうことで、徐々に採捕量を少なくしていくか、何らかの方法を講じていただいて、何年度などということは申さないが、近い将来、これを禁止するか、あるいは採捕量を厳しく制限していくかというような策を講じていただきたい。

知事：ウナギの話については、今すぐ分からないので、今のご指摘の内容を担当に伝えるとともに、今後の方針について、後でご説明させる。

砂利の話については、確かに平成 21 年度に向けて結論を出すべく、今関係者の皆様と話し合いをさせていただいている。直近の検討状況について、こちらも後でご説明させていただく。

その上で、一般論になってしまって申し訳ないが、お話をさせていただきたい。高知の財産は、山、川、海で、特に川については、清流であるということが財産の中の財産、もっと言えば、単にきれいな水というだけではなくて、そこにいろいろな魚や生き物が住んでいて、要するに川が滋味豊かであることが高知の非常な財産だと思う。私は、特に物部や奈半利に行くと、濁水の問題でものすごく怒られている。この濁水の問題を始めとして、川を豊かにするということについて、自然を相手にした問題なので、特効薬はないのかもしれないが、真剣に取り組むべき課題ではないかと思っているところである。国に、国土計画審議会という審議会があって、今度、私がその審議会の委員になることになった。川を豊かにする、清流をいかに守っていくのかという問題を、しっかりとアジェンダとして、課題として、確実に取り入れてもらうべく努力をしていきたいと考えている。濁水の問題について、水の流し方を変える、これはものすごくお金がかかることかもしれないが、何らかのことを考えないといけないと思うし、もう一つ、この間、仁淀川町にＣ．Ｗ．ニコルさんが来られて、パネルディスカッションに出席したが、そのときに、自然工法の話などがあった。ちょっとした石の置き方の工夫で、水温が変わって、魚が戻ってきたりするということで、そういう取り組みも、地道かもしれないが、川を豊かにしていくための工夫なのかもしれないと思ったりもした。いずれにしても、川をいかに豊かにするのかという観点は、高知県などが、率先して声を上げていく課題ではないかと思っていて、そういう形で努力したいと思っている。

【柳野集落での活性化の取り組み】

Ｆさん：（急遽欠席のため、Ｇさんが原稿を代読。原稿の要旨は以下のとおり。）

今はどこの集落も同じだと思うが、私たちの集落、柳野は高齢化が進み、独居老人が多くなり、この先集落がどうなっていくのか、不安でいっぱいである。しかし、そんなことばかり言っても仕方がないので、私たちは地域を少しでも元気にしよう、明るくしようということで、平成８年に「明るい柳野を創る会」を設立し頑張ってきた。まず、粗大ゴミの撤去をしたり、花を植えたりし、そして、途絶えていた 800 年の歴史のある柳野豊年踊りも 24 年ぶりに復活させ、少しずつ活気を取り戻した。また、年寄りでも何とか力を合わせてやれることをと思い、地域支援企画員、農業改良普及所の方たちのご協力により、「ふれあいの里柳野直販所」を作った。現在、正会員 19 名、準会員 26 名で運営している。最高年齢、女性 84 歳、男性 82 歳の方たちも元気に当番をしている。場所的に分かりにくいという方が多く、売上げが伸びなかったが、いろいろ宣伝をしてもらい、自分たちでも幟を立てたりして、少しずつ人も来てくれるようになった。同時に水車も作り、お米やソバ、キビ等をついたり挽いたりして売っている。また、水車で挽いたそば粉でそば打ち体験もしていて、県外から多く参加してくれる。今年は６回、９月 28 日には大阪から 12 人来てくれた。炭焼き体験、コンニャク作り体験も行っていて、炭焼き体験には、今年、３回県外より来てくれ、12 月にも予約が入っている。

また、平成 19 年３月 25 日に、Ｇさんと山本地域支援企画員さんのご協力により、34 年ぶりに小川ミニ 88 か所めぐりも復活させることができた。みんなの心が一つになって 88 か所めぐりができたことが本当に良かったと思っている。今年３月に２回目を実施し、高知市の方も参加してくれた。これからも年に１回は実施する予定で、今後は、お大師まんじゅうも作ってみようかという話も出ている。

最後に、私たちの憩いの場所でもある「ふれあいの里柳野」だが、道路事情が良くなれば、もっと売上げが伸びるのではと思う。国道 439 号の一部道路が狭くなっている場所まで来て引き返す方がいることを聞いたので、この道が１日も早く良くなってくれればよいと願っている。

【高知県へのＵＩＪターンのキャンペーン、環境に優しい地域としてのいの町・仁淀川流域】

Ｇさん：今日、知事のお話を聞かせていただいて、知事に就任なさってから非常に短期間で高知県の実情を的確に把握なさっていること、なおかつその情報量に驚いた。非常に戦略的なお考えをお持ちで、知事に心から期待して、頑張っていただきたいと思っている。職員の方もトップにお考えが似てくると思うので、職員の方も知事のカラーに早く染まって、行動あるのみというふうに頑張っていただきたいと思う。私は事業をいくつかやっているので、たくさんのことに関してお願いしたいが、２点にしぼってお願いしたいと思う。

私は 10 数年前にＵターンしてきて、高知での難しさを感じる中で、高知県人が高知に本当に誇りを持つということが大事ではないかなと感じている。そして、昭和 30 年代に、金の卵といって集団就職、あるいはその後大学進学で出て行ったまま、高知に戻ってきていない方たちが退職の時期を迎えている。高知に住んでいる者自身が高知に誇りを持ち、なおかつ、「戻っておいでよ高知県」というような大キャンペーンをして、ふるさとの人口を増やせないかなと考えている。吾北出身で大企業で出世なさっている方も随分いらっしゃる。そういう方が、今の経済状況の中で、急にふるさとに帰りたいというようなお話も出てきている。今までの状況と、いろいろなことが変わってきている中で、こんなにいい高知県に帰って来いという大キャンペーンを、高知県においてはしていただきたいなと思っている。歴史を勉強すればするほど、高

知県は、誇りを持てることがたくさんあるように感じている。それを、県民が県の指導の下に掘り起こして、勉強し直してみるということが大事ではないかなと思う。

もう一つは、清流仁淀川のお話が出たが、これほど美しく、なおかつ流域に人がたくさん暮らしている川は全国にも例を見ないと、東京の方などがおっしゃってくださる。その中で、環境、資源循環型社会、エネルギーなどをキーワードにして、いの町が、生活のありとあらゆることについて環境に重きを置いた流域、地域にならないかなと強く感じている。林業においては、四国一の素材生産業者もいて、素材生産、林業の生産では、仁淀川流域は非常に力を持っている。これを活かして、バイオ燃料であるとか、そういう環境保全型の事業を是非ともこの流域に導入していただけないか。ロシアではダーチャという小さな郊外型の別荘があって、それは、菜園があり、小さな生活ができる程度の小さな家だそうだが、そのおかげで、経済状況に非常に変遷があった中でも餓死する人はいなかったそうである。高知の山間部で、ローコストの家を建てて、生活していただく、環境に優しいローコストの生活が精神的にとても豊かにできるという理想的な地域が仁淀川流域、いの町でできないかなということを日々考えている。

知事：国道 439 号の改良は、いの町では、津賀谷工区と柳野工区で行っていて、津賀谷工区については、年度内に終わる。柳野工区は、早期開通を目指したいが、総務省の行政評価で引っかかって、時間がかかっているようである。Ｂ／Ｃの計算方法で、総務省の行政評価局の主張におかしいところがある。ただ、こちらも見直さないといけないところがあるようなので、言うべき主張をしっかりして、早期再開、早期完成を目指していくべきものだと考えている。

誇りを持つことが大切だというお話は、おっしゃるとおりだと思う。先ほど私は高知県を「眠れる獅子」と申し上げた。ものすごい潜在力を持っている県だと思っている。歴史にしても、自然にしても、他の県で今から作ろうとしてもできるようなものではないし、例えば、よさこい祭りは、全国で 100 か所もやっている。こういうアイデアを持っている県でもある。さらに優しさという点でも、おもてなしは第４位、何よりも食べ物がおいしいというのは、総合力の勝利で、素材もいい、食文化もいい、さらに一緒に食べる人の人柄もいいから、おいしいということだろうと思う。企業さんなどでも、ニッチだが、全国一や世界一の企業さんもたくさんある。日本一が 18 以上ある。そういう力を持っているが、残念ながらこの力が、全体として見たときに表れてきていない。どうしてもインフラ整備の遅れなどのハンディがある。そこは少しずつ克服していかないといけないわけだが、そういうハンディがある中でも外に目を向けていくためにどういうことをしなければいけないのかということを、今一生懸命、先ほども申し上げた産業振興計画などで考えている。経済は民間の活力こそが主役ではあるが、特にスタート時点では、ハンディがある県であるので、県も手を足していくということ、先頭に立って、汗をかいていくということをやらないといけないのではないかと思っている。ＵＩターンなどについても、正に、今後前向きに取り組んでいくべきことだと思うが、残念ながら、今高知県は本当に県外に向けての情報発信ができていない。先ほど申し上げたアンテナショップの数字が象徴的だが、高知県のアンテナショップには年間 11 万人のお客さんが来る、一方、北海道や沖縄は 200 万人級である。11 万人に留まるのはなぜなのかというと、首都圏にそういうお店を置こうとしたときの立地と家賃の問題があって、お金が払えないからこれくらいの金額で抑えて、不利な立地で我慢するということをしたからである。結局は予算の配分の問題で、どこに

力を置くのか、高知のような県であればこそ、外に向かって情報発信するということをもっと考えるべきではなかったかと私は思っている。今後はそちらの方向に重きを置いていきたいと考えている。幸い「龍馬伝」もあるので、高知県のプレゼンスが否が応でも高まる時期が来ると思う。プレゼンスを高めるための投資をして、そのリターンが一定程度期待できる時期が来ると思っているので、この好機を逃さず、そういう取り組みもやっていきたいと考えている。

仁淀川のお話についても、おっしゃるとおりで、これも高知県の財産だと思う。私には２人息子がいるが、選挙に出ることになる前、高知に帰省したときには、子どもがいつも一番行きたがったのは仁淀川であった。川原を素足で歩いて、ゴリを追いかけて捕るのが息子たちの一番好きな遊びで、私も何度も行った。この川をいかに守っていくのかということが大切だと思うし、山、川、海の循環を大切にしていくことも必要だと思う。「高知は地球の環境のモデル」といったキャッチフレーズで、高知県環境基本計画という計画をつくろうとしている。バイオの話についても、重点的に取り組んでいくべき対象だろうと思っている。ただし、今は公的な資金を入れないとペイしない状況である。バイオにするための元々の木の用材部分がある程度の値で売れて、バークや枝葉の部分がチップとして売れていくという体制が作れることが理想で、そうすると、自立的に回るようになっていくのだろうと思うが、まだそこまでには至っておらず、こういう取り組みの進め方について勉強を重ねていかないといけないと思っている。

【県道 40 号石鎚公園線の冬の通行止めの解消】

Ｈさん：私は、本川地区の山岳観光について話をさせていただきたい。本川地区は、売る物は山と山菜しかないということを私は昔から言っているが、山の四季の素晴らしさはみんなに見てもらいたいというのが私の考えである。四季の中でも一番きれいなのが、冬ではないかと思う。そこに行くまでの県道 40 号石鎚公園線は、よさこい峠まで道がついているが、冬場は、白猪谷というところで通行止めにしている。これを何とか冬場も開放してもらいたいというのが私の願いである。というのは、石鎚、瓶ヶ森は、四季を通じて、ものすごくきれいだからである。町道を使って健康マラソンやウォーキングをやっているが、冬場にも、カンジキみたいなものを履いて、雪の中を歩くといったこともやったらいいのではないかと思っている。瓶ヶ森の氷見二千石原といわれる笹原、伊吹山のブナの原生林、これらを是非知事さんにもおいでていただいて見てもらいたいと思う。同時に、現在、もう紅葉がものすごくきれいでもあり、是非おいでていただきたい。一昨年には、ＮＨＫで日本の名峰 50 選という番組があって、富士山が１位で、槍ヶ岳が２位、大山が３位で、４位が石鎚山であった。山においでていただいて、霧氷などを見ていただいたら、考えもかなり変わると思う。また、町長にもお願いをしたが、よさこい峠、瓶ヶ森、寒風山トンネルの近くに３か所くらいトイレを作っていただいているが、かなり古くなって、機能的に良くない状態になっているので、何かよい知恵、お金があったらよろしくお願いしたい。

知事：冬場に通行止めにしているのは、管理の問題ということのようである。何とかしたいところだと思うが、お金との相談などもあってということなのだろうと思う。集落がなかったりすると、なかなか厳しいようである。ただ、そういう素晴らしい観光資源があるというお話なので、今日は課題として引き取らせていただきたいと思う。

Ｈさん：県道 40 号線は、本山土木事務所が管理しているときはよさこい峠まで行っていたが、組織改変で本山土木がなくなってから、白猪谷で止まるようになった。どうしてだめになったのかという苦情が私のところにも来るので、是非よさこい峠まで行けるようにお願いしたい。

知事：例えばお金がどれだけかかって、どれだけ利用ができるかといった、Ｂ／Ｃの問題になってくると思うので、それは勉強させていただきたい。

【ブラックバスの活用、河川敷への車の乗り入れ、中山間地域の振興策、鳥獣被害対策、】

Ｉさん：今日は地域振興と福祉についてお願いがあるが、漁協の理事なので、まず川のことを先に言わせていただきたいと思う。

今、ブラックバスが大変な問題になっていて、駆除の運動をしているが、全部駆除ということは難しいと思う。なので、地域支援企画員の方々も力を入れてくださって、食べることを考えようと、いろいろ試作品を作ってくださっている。魚を持ってこられるとすごく臭いが、スズキ科なので身はおいしい。塩焼きでも結構食べられるし、お刺身でも食べられる。ダムというダムにいると思うので、県でも、食べる方向に持っていっていただき、駆除も大事だが、駆除した魚を捨てるのではなくて、売れる方向へ何とか導いてほしい。

それと、私が仁淀川などをずっと下流に下ってみて思うのは、河川敷に車の乗り入れが多い。これは伏流水などを遮断して、魚の生育を妨げるという話を聞いたことがある。キャンプ場もあるし、川に遊びに行く人は多いと思うので、全部禁止は難しいと思うが、どこにでも勝手に入っていいということではないという形を取れないものかなと思っている。

それと、私は、旧本川村に住んでいるが、限界集落があちこちにあるような地域である。そこで地域振興というと、事業の開発や既存の事業の発展を探っていく方法も一つと思う。もう一つは、高齢者の元気を引き出して、たとえ人が住まなくなる寸前の集落になっても、明るく地域で暮らしていけるようにすることだと思っている。１点目の事業の発展については、今キジを飼う組合ができていて、味はよそにはひけをとらないと思っているので、その良さを広く知らせてほしいと思う。また、先ほど、農家の方の廃棄処分に困っている果物や野菜の話も出ていたが、こういうものを安く分けてもらえないだろうか。キジは結構何でも食べる、食欲旺盛な鳥で、高知県はキジだけではなく、土佐ジローなども飼っていると思うので、連携というか、取りに行ったらいくらで売ってくれるといった情報を得られないものかと思っている。飼料が高くなって、生産が苦しいので、そういうものも利用させていただけけないかと思う。２点目の、お年寄りの元気を引き出して明るい地域にしていくということでは、本川地区には、サルやイノシシが結構多い。サルというのはすごく利口な動物で、お年寄りには全然見向きもしない。男の人が行くと逃げるが、年寄りや女の人が行っても逃げなくて、平気で作物を取っていく。高齢者では、柵を作るといったことがなかなかできないので、何か援助がいただけないかと思う。それと、一人暮らしを少なくする取り組みを、サロンといったものを通じてやっている。私は、よく自分の地域の役場の課長に言っているが、ボランティアはできるが、ネギまで背負ってはできない、つまり、自分のお金を出して、体力も使ってということまでは難しい。一人暮らしのお年寄りの誕生日会をしているという話をどこかで聞いて、それもいいなと

いう話にはなっているが、段取りや材料を買う資金がネックになっている。時代の流れで、食べ物は補助の対象にはならないということがすごく広く浸透しているが、お年寄りを呼んで何かしようかということになると、やはり食べ物が必要で、その援助がどこかでできないかと、実際にサロンを運営している方に言われたのでお考えいただきたい。

最後に、福祉について、これは社協の人とも話をしてきたが、福祉の担い手の育成の問題である。今お金がないから臨時やパートで、という形をとってきている部分がいろいろな面で多いと思うが、基礎をしっかり身に付けて、いろいろな先輩の所作を覚えて、長く勤めてくれる人が世代ごとにいないと困ると思う。社協とか福祉の場においては、どうしても経験が必要な場があると思うので、そういうところにはお金を削らずに、次代を担ってくれる人を育成していくことも考えていただきたい。

知事：まず、川のお話について。私はブラックバスを食べられると初めて知った。その後、キジのお話もあったが、こういう話は、それこそ、地域支援企画員がいかにバックアップさせていただくかというお話で地域に在住させていただいているところである。ハネ物をうまく組み合わせるというお話もあったが、そういう地域地域を結びつけるということこそ、公の役割ではないかと思っている。町の役場の皆様方とも協力もさせていただきながら、そういうことをやらせていただきたいと思う。

それと、河川敷に車の乗り入れが多いと水源が切れるという話があるわけですか。

Ｉさん：伏流水に魚のエサになるような生物が結構生息しているのが途切れるということである。

知事：これについては勉強させていただきたい。実は、河川には関係する法律がたくさんあるので、すぐに何かをするということはできないかもしれないが、川を豊かにするという観点から勉強すべきポイントではないかと思った。

それから、サルの話だが、これは本当に大変である。お手元に「鳥獣被害対策事業のあらまし」という資料を置かせていただいていて、詳しいところはこちらをご覧いただきたいと思うが、今はシカと戦っている。シカについて、今年、狩猟期にメスを捕ったら１万円、オスを捕ったら５千円の報奨金をお支払いするということを始めさせていただいている。シカは肉があまり取れず、狩猟期になると捕っていただけなくなるので、お金をお支払いすることで、できるだけ狩猟期にもシカを捕っていただくようにしたいという思いで、特に、繁殖力があるメスの方を捕るインセンティブをということでやらせていただいている。サルについては、接近警戒システムやモンキードッグというようなことをやらせていただいているが、サルはご指摘のとおり、すごく賢いので、サル対策はまだまだ試行錯誤の段階だと思っている。引き続き研究を続けているのでお待ちいただきたいと思う。

その次の、一人暮らしを少なくする取り組みについてだが、「中山間地域生活支援総合事業のあらまし」という資料で詳しくまとめさせていただいている。中山間地域対策については、２つあって、生活を支援するものと、産業をつくるものがある。産業をつくるものについては、今、産業振興計画の中でもいろいろと研究を重ねているところで、生活支援については、この資料でご説明させていただいている。ポイントは３点で、１点目は、簡易水道などを含めて、

水の確保が極めて困難となっている地域がある。そういうところに水の確保をしていく事業を作っていこうというもの。２点目は、特に高齢になられると、移動が難しくなってくる。なので、移動販売を含めた足の確保ということをやっていくものである。移動販売の仕組みづくりや、コミュニティバスのようなものを作られる場合などである。谷から沢に入って移動販売をされている方が、軽トラの買い替えを契機に辞めてしまわれる事例があるということを、お聞きするので、そういうものに補助金を出す仕組みづくりである。３点目が、集落維持活動支援事業で、一人暮らしを少なくするといったことも含めたいろいろな地域のお取り組みに対して、総合的に支援申し上げるという仕組みであって、こういうものも場合によってはご活用いただけるかもしれない。地域支援企画員からご説明さしあげるので、こういう仕組みもお使いいただければと思う。中山間地域で、高齢で、かつ、一人暮らしの方がたくさんいらっしゃるし、今後どんどん増えていく。これにどう対応させていただくかが行政の大きな課題だと思っている。今まで何千万単位だった予算を、今年は２億円まで増やしていて、一定の限界はありつつも、対応させていただいているところである。

福祉関係の人材の育成、安定雇用というのは、難しい話だと思う。高知の中山間地域などでは、民間事業者の参入が全然進んでいない。一番良くないのは国の規制ではないかと思っている。例えば、職員の必置規制があると、利用者が多いところでは簡単にクリアできるが、少ないところでは採算が取れない、そういった問題がいくつもある。今、その規制緩和を訴えているところであるが、厚生労働省などは、緩和する方向で検討しているはずである。そして、介護も含めて、社会福祉系の人材をいかに育成していくのかということが大きな課題であったので、女子大学の改革で、池キャンパスに社会福祉系の学部を、人数を増やして、設備も増やして、作っていくということをやった。効果が出るまでに時間がかかるが、根本的なそういう人材育成については、県は今力を入れていく方向で、女子大の改革の大きな眼目の一つである。

（会場の方からのご意見等）

【龍馬の脱藩道の地域活性化への活用】

Ｊさん：知事に直接お目にかかるのは初めてだが、１か月半から２か月半ほど前に、龍馬関係についてメールをし、返信をいただいたＪと申します。

実は、私自身はいの町民ではないが、隣の高知市春野町に住んでいて、８年ほどから高知県と四国の自然や歴史で知られていない部分を掘り起こして、それを地域活性につなげていけないかということで、ガイドブック作りや、一部の市町村に対しては、直接ハイキングコースの整備の助言などをしている。今年７月に高知新聞とＲＫＣラジオで取り上げられた、今年発売した龍馬のガイドブックについて言うと、これまではいの町から津野町まで、龍馬の脱藩道は車道のコースしか知られてなかったが、実際に調査してみると、すべての市町村に藩政期のままの脱藩道が残っていた。実際に残っている素晴らしい道のことを知っていただければ、それが、いの町にとっての最大の観光資源になると思う。いの町の是友（これとも）辺りには、江戸時代からの道で、ヒガンバナが自然群生している道やいろいろな花が咲いている道が残っている。これについて、いろいろな文献や明治時代の地形図などを徹底的に調べ、私どもは、これが龍馬が通った脱藩道であるという結論をつけた。龍馬には、全国的な知名度があるので、これを地域活性に活かさないでおかない手はないと思って、例えば龍馬脱藩道のパネル展など

も計画はしているが、いろいろな協力や費用などが必要なので、すぐには開催できない。いの町にこういった素晴らしい道が残っているからといって、いの町だけで龍馬脱藩道を取り上げてやっていくのではだめであって、あくまでも、高知全体で取り組むことに意義があると思う。というのは、一つの市町村ではできないことでも、複数の市町村が集まれば、財政だけではなくて、いろいろなボランティア活動なども起こってくるので、何とかこれをいの町の活性化につなげていただきたいということを切に願っている。私は過去に 10 年間関西に住んでいたことがあるが、実は関西は、多くの人の予想に反して、非常に自然が残っているところで、特にハイキングコースの整備が優れている。ガイドブックで取り上げられていないような道でも、きちんと登山口から各所各所に道標が整備されている。それを高知県で見てみると、例えば「四国のみち」は有名だが、実はその９割方が車道であって、ウォーカーやハイカーにとっては、全く魅力のない道である。しかし、こういった藩政期のままの道を歩くということは、都会のウォーカーやハイカーにとっては、すごく魅力的なものである。なおかつ、これが龍馬が通ったということであれば、素晴らしい観光資源になると思っている。いの町長を始め、高知県としても、私どもは新龍馬脱藩道と呼んでいるが、これを何とか全国発信していただけないか。今、高知市役所のロビーで、新龍馬脱藩道パネル展をできないかということを打診はしているが、まだ決裁が下りないようである。もしそれが無理な場合は、高知県のそういったところで開催していただき、かつ、そこに各市町村のブースを設けて、パンフレットを配ったり、観光や物産をアピールしていけば、２年後の「龍馬伝」に向かって非常に沿線市町村が盛り上がると思う。各自治体及び県も是非推進していただけないかと思っている。

知事：いの町長のお考えもおありになろうかと思うが、龍馬がらみでいろいろな地域の資源を発掘するというのは一つのポイントである。脱藩の道なども、一つの大きな資源ではないかと思う。「功名が辻」のときと違って、今度の「龍馬伝」に向けて、全県内にいかに取り組みを広げていくかというのが大切な、ポイントの中のポイントだと思っている。「龍馬伝」が決まったときに、ＮＨＫの会長さんのところにお礼を言いに行ったが、そのときも安芸市長さんと、北川村長さんと、高知市の副市長さんと、それから土佐清水市長さんと一緒に行った。東から西まで、いかほど左様に広がりがあるということを強調したかったからであるが、そういう視点でやっている。是非、龍馬に関する地域地域の資源の発掘を、おやりになればいいと思うし、特にそれが数珠つなぎになっているといいのではないかと思う。パネル展は県でもできると思う。私の秘書官もいるので、１回話をさせていただければと思う。別に、それはお金をかけなくても、ソフトとしてＰＲすることでできると思う。

【保育現場の実情を踏まえた支援】

Ｋさん：保育園に勤めているＫと申します。保育現場の実情をお話しさせていただこうと思う。私は、まだ保育士になって 20 年足らずだが、最近子どもたちがままごとの中で、お母さんごっこなどをすることが減ってきた。私が子どものときには、ままごとで、お母さん役はすごく人気があった。お母さんは家の中で動き回っていて、料理をしたり、洗濯をしたり、お父さんにお茶を運んだり、すごく忙しかったが、それに憧れがあった。最近のままごとの中のお母さん役はとても人気がなくて、たまにお母さん役になっても、レンジからチンと料理を出して運ん

でくる。お父さん役はさらに人気がなくて、なぜかと思って聞いてみると、お父さんはほとんど家にいない、いてもゲームをしているとか、ごろごろ寝ているという返事が返ってくる。今一番人気なのがペットで、ペットは家でとてもかわいがられているのを子どもたちが見ているというのがあると思う。本当に育児能力が低下しているということが目に見えて分かってきた。昔は、お母さんは抱っこして、目と目を合わせて、ミルクを与えながらいろいろ語りかけもしていたが、最近は、目と目を合わせてあげているような現場は見ないのではないかなと思う。携帯を操作しながらあげたり、テレビを見ながらあげたりという寂しい実情で、子どもが一生懸命お母さんを見ていて、何か言っていても、それに気づかないお母さんがとても多いと思う。紙おむつも改良がされて良くなってきていて、昔は１回おしっこをしたら、子どもが気持ち悪くて泣いたりしていたが、今は１回や２回のおしっこでは紙おむつは気持ち悪くないようになっているので、そういうときの、「気持ち悪いね、早く換えてあげるからね」といった語らいもなくなっている。手抜きの育児ができるようになっているが、育児は手間と愛情をかけていくべきことだと思う。是非、現場の保育士さんや保健師さんの声も聞いていただいて、本当に今、どういう育児支援、子育て支援が必要なのかということを考える参考にしていただきたい。

知事：正直、今のお話を聞いて、大変なことだなと思った。教育の５つの改革の中に「幼児教育改革」と書いてある。親育ち支援の強化ということで、まだ出前講座といった程度に留まるが、幼児の教育がすごく大切ではないかというご意見があって、今回この分野に踏み込んでいった。また、子育て支援という観点からもこの点は重要ではないかということもあって、書かせていただいているが、今のお話を踏まえて、担当課長にも伝えて、一度、現場のお話や実情を聞かせていただく機会などを持たせていただきたいと思う。

【味が良く廉価な物の量産による産業振興】

Ｌさん：産業振興計画の中で、農産物の件についてご意見を申し上げたいと思う。端的に言うと、園芸作物は非常に高いという感覚を持っている。確かに付加価値をつけて、高い値段で売れば、農家も収益が上がるかもしれない。しかし、高価なものは、もう１回買って食べようという気になるものは少ないのではないかと思う。大衆が食べてこそ初めて量産できていく、農家に潤いが出てくるのではないか。これが私の持論である。なので、量産できる農作物をお考えいただけたら、他県と競争できるのではないか。競争するためには、付加価値が高いものよりは、おいしいものを安く生産する方が私は産業の振興に役立つのではないかと思う。ちなみに、今日おいでのＢさんのマンゴーを昨年買って友人に送ったら大変好評だった。今やマンゴーと言えば、宮崎が大変な値段である。しかし、あんな高いものを２度３度買って食べる人がどれくらいいるか。おいしくて、安くて、大量に生産できて、初めて産業が成り立っていくと思う。宮崎のマンゴーを食べたことはないが、とても我々では手が届かない。高知のマンゴーで通用すると思う。

知事：おっしゃるとおりで、市場のタイプによって、複数の種類を持っておくというのが、本当は一番強いのではないかなと思う。高くてものすごくおいしい、安いけどそれなりにおいしい、これらの組み合わせである。高くてものすごくおいしいもので、市場全体の価値を上げていき

ながら、安くて普通のおいしいもので、量を稼ぐという仕組みなのではないのかなという感じがする。高知県のナスや文旦などでも、段々とそういう役割分担ができつつあるのかなという感じもしていて、両方ないといけないのではないかと思う。お金持ちの方をターゲットとするものもあると思うし、高品質のナスや文旦を、例えばテレビで見たり、何かの機会に食べたりすれば、一般のスーパーで、こちらの安い方でもおいしそうだから、買ってみようかというようにつながっていけるのではないか、そういうことが一つの良さではないかと思っている。

【バイオ燃料の産業振興計画での位置付け】

Mさん：知事から産業振興計画の中で県外の市場に打って出るという言葉があったが、今まで、高知県は、どちらかと言うと、マイナスの方向を向いている中で、この言葉が出てきたので、本当に心が熱くなったというか、気持ちが高揚するような感じがした。自分もこの計画の中で何ができるのかということを真剣に考えて、アクションをしていきたいと本当に思った。そこで一つ質問だが、計画の中で、地産地消の徹底という言葉が出てきたかと思う。私はエネルギーの地産地消ということを考えているので、これについてご質問をしたい。今まで、山の木は、用材として利用されてきたが、例えばハウスの加温用燃料としてもっと積極的に活用できないのかと思っている。例えば、ピーマンを栽培する 10 アールのハウスであれば、年間 15 キロリットルの重油がいる。重油１リットル 100 円で換算すると、10 アールのハウスで年間 150 万円の重油が消費されているということだが、これは化石燃料なので、ほとんどが国外から来ている。これを、木を使うことによって、地域内で消費することができれば、非常に大きな経済的なインパクトが、内需という点であるのではないだろうかと考えている。また、先ほどの例の 10 アールのハウスでは、重油を使うと、年間 40 トンの二酸化炭素を排出しているが、これもゼロになる。また、環境に優しい農産物ということで、少しでも付加価値をつけて売ることができれば、外貨獲得ということで非常に大きな意味があると思っている。Ｇさんのご質問に対して、バイオに関しては用材が売れてからという話があったが、バイオ燃料について、産業振興計画の中でどのような位置付けがされているのか、お構いない範囲で教えていただきたい。

知事：バイオの話も、大きなテーマの一つになっている。産業分野間の連携課題ということで取り上げて、このバイオ燃料をいかにものにするかということが、一つのテーマになっている。バイオ燃料がハウスで使えるようになれば、そのハウスの燃油代は少なくなる。しかしながら、木を切り出して、実際にチップまで加工をしていく、バイオ燃料として使えるようにするためのコストがかなり高い。なので、これを燃料として売ると、赤字になるケースがものすごく多い。これを黒字にできれば、自立的に回っていける、本当に使える燃料になっていく。いかに効率的に切り出していくのか、そして、需要をどう増やしていくのかが課題となっている。また、バイオを使った窯の仕様が完全に県内で統一されていないという問題もある。先ほど、用材が売れてこそというお話を申し上げたが、木の丸太があってバイオにする、この木の丸太の中身の部分が、昔は高く売れていた。ところが、輸入材が来て、安くなってしまって低迷している。最近はこの見直しも進んできたりしているので、丸太の中身が高値で用材として売れて、周りの産業廃棄物になっていたものが、バイオで使えるということになれば、いわば、サケの頭から尻尾まで全部食べられるというような話になって、効率的になる。こうなれば、トータ

ルとしてコストが見合うようになるので、これが一番の理想である。そうでなく、バイオ単独で利用するとしても、コストを安くして、黒字体質にするということの研究を続けているという状況である。今日も、産業振興計画の検討委員会で委員さんから、ニーズ側からももっと研究も進めなさいというご指摘を受けたので、引き続き勉強していくテーマだと思う。

【四国４県を挙げての有害鳥獣の駆除】

Ｎさん：四国知事会で、有害鳥獣の駆除、特にシカ、イノシシを徹底的に議題として取り上げていただきたい。８の字ルートは新聞でよく見るが、それにも負けないくらい、四国４県の知事が力を合わせて、有害鳥獣を駆除していただきたい。

知事：分かりました。今年の知事会でも議題にはなっているが、もっと力を入れたいと思う。実は一つ問題があって、愛媛の知事さんも有害鳥獣対策には一生懸命であるが、想定している動物が、愛媛の知事さんはイノシシ、私はシカと違っている。ただ、いずれにしても、県境はないわけで、例えば香美の方でも、市町村共同で一斉に捕獲するといった活動をされて、効果的だったと聞くので、おっしゃるとおりもっと力を入れるべき分野だと思う。

（知事のまとめ）

皆様方、大変遅くまで、３時間にわたる間お付き合いいただき誠にありがとうございました。まず、出席者の皆様方、本当に有益なご意見を賜り、ありがとうございます。十分お答えできなかったところについては後日お話をさせていただく。傍聴に来ていただいた皆様も、遅くまでお聞きいただきありがとうございました。

私はいつも申し上げていることだが、この「対話と実行」座談会で伺ったご意見を聞きっぱなしにするということが一番いけないと思っている。いただいたご意見を、個人情報に配慮して記録を作らせていただいて、それを関係部局で共有させていただく。また、今いただいたお話の中には、今後の政策にそのまま材料として反映させていただきたい、あるいは研究をさせていただきたいという課題もいくつもあった。そういう形で今後の県政に活かさせていただきたいと考えている。

本日、産業振興計画の中間とりまとめを発表したところだが、高知県の産業振興に向けて、新しい動きを行っていきたいと考えている。先ほど言っていただいたが、内向き志向ではいけない、外にも打って出て行くという意識が必要だと考えている。教育の問題も非常に厳しいが、子どもたちのためであるので、ひるまないで努力を続けていく必要があると考えている。今後とも頑張ってまいるので、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げる。